

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

A中は、小規模校の良さを生かし、きめ細かな指導を展開している。市内全域から静かで落ち着いた環境を求めて、学区を超えて通ってくる生徒もいる。特色ある教育として、学校の裏山で実施する林業体験、校内のビオトープを中心に行うホタルの学習、地域の方々を招いて行う音楽会、公道を走り抜ける小中合同のマラソン大会等があり、地域と連携して実施している。また、地域のボランティア活動に生徒が積極的に参加している。今年度はトレイルランの大会、土砂災害訓練、地区の文化祭、資源回収等で生徒が活躍している。



A 中学校 林業体験



B 中学校梅もぎボランティア

【取組2】(B中学校)

全校生徒に呼びかけ、地域の行事等にボランティアで参加している。梅干し作りは、6月に「梅の公園」や校内で収穫した梅の実を地域の大人の協力で5か月かけて梅干しにする。多摩川一万人清掃、地区の運動会の運営、神社の例大祭、地区文化祭、柚子もぎ、さつまいもほり、マラソン応援隊、観梅市民祭りの甲冑パレード等の活動がある。5回以上参加した生徒は「ボランティアマスター」として全校生徒の前で表彰されている。



【取組3】(C中学校)

C中では「授業スタンダードプラン」を各教科で実践している。

理科の研究授業では、1年生の「音」の分野を取り上げた。複数の音源を使用し、実験結果の記録に一人1台端末を利用した。授業では協働的な学びと個別最適な学びを実現し、生徒個々の学ぶ意欲を引き出していた。

授業を実施するにあたり、音源の選択や授業の流れの確認、理科室の整備等で助言と支援を行った。

【取組4】(C中学校)

校内のミニ研修で、「不登校の理解」についての研修を新規採用職員に実施した。

研修の中で、「学級の不登校生徒にどのように対応するか」について、考えてもらうことができた。保護者や小学校、関係機関との連携が、生徒理解及び支援に重要であると伝えることができた。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（B中学校）

支援会議は管理職を含め9人ほどで毎週金曜日に設定している。要支援生徒の情報（電話連絡・家庭訪問・面談等）は「支援シート」に記録する。会議で支援方針を立て、次週、進捗状況を確認する。支援により、不登校の生徒が登校したり面談が実現したりして、校内別室や相談につながる事例が増えてきている。

アウトリーチによる支援（C中学校）

C中では、家庭訪問と登校支援を続けている。生徒が登校できた日には、別室で教科の課題や、SCや教員と交流する時間を取っている。家族の了解を得て、担当医にも支援方針を確認して対応している。登校できない日が続くこともあるが、生徒や保護者と連絡を取りながら、継続的な支援を続けている。

校内別室における支援（D・E中学校）

D中では、不登校対応巡回教員も含めて5人で対応している。校内別室の利用前に校内委員会で確認し、D中の担当職員と保護者面談を行い、利用を開始している。学習課題（数学、国語等）や教科のワーク等を行えるように調整している。SCの部屋が隣で心理的な安全性も確保できている。

E中では、不登校対応巡回教員を含めて4人で対応している。校内別室の利用前にE中の担当職員と保護者面談を行い、利用を開始している。午前利用と午後利用の生徒に分けて毎日開室し、多くの生徒が利用できるようにしている。生徒の学習と心の安定を目指し、長く休んでいた生徒が「校内別室なら行ける」と、定期的に登校できるようになった事例もある。

デジタル機器を活用した支援（E中学校）

一人1台端末で個別学習や授業配信、各種アンケートの回答を行っている。担任と連携し、生徒の状況に合わせて活用している。



関係機関との連携（D中学校）

学区内に教育支援センターの分室があり、別室を利用している生徒が状況に合わせて教育支援センターも利用している。不登校の期間が長い生徒は、地区の教育支援センターと連携しSSWの支援を受けられるようにしている。

成果

担当する5校は小規模校から大規模校まで多様であり、各校の不登校の生徒の状況を共有し、支援の充実を図ることができた。

課題

生徒の実態に応じた的確なアセスメントシート作成のためには、不登校生徒をSCや関係機関につないで、支援の充実を図っていく必要がある。